

研究連携のあるべき姿

平成27年12月3日

東京電力株式会社

福島第一廃炉推進カンパニー

プロジェクト計画部



東京電力

研究連携のあるべき姿：研究連携の必要性和注意点

- 事故炉廃炉の知見は電力にも炉メーカーにも乏しい
- 対象スコープは幅広く基礎基盤／応用・実用化双方にまたがる
- 従来原子力工学の範疇に入らない技術に需要
- 社会技術的視点も重要
- 国内外英知結集の必要性

但し

- 東電の課題は東電独自のもの
- 具体的な技術開発ニーズへの分解も簡単ではない

研究連携のあるべき姿：研究機関による立場の違い

立場は色々

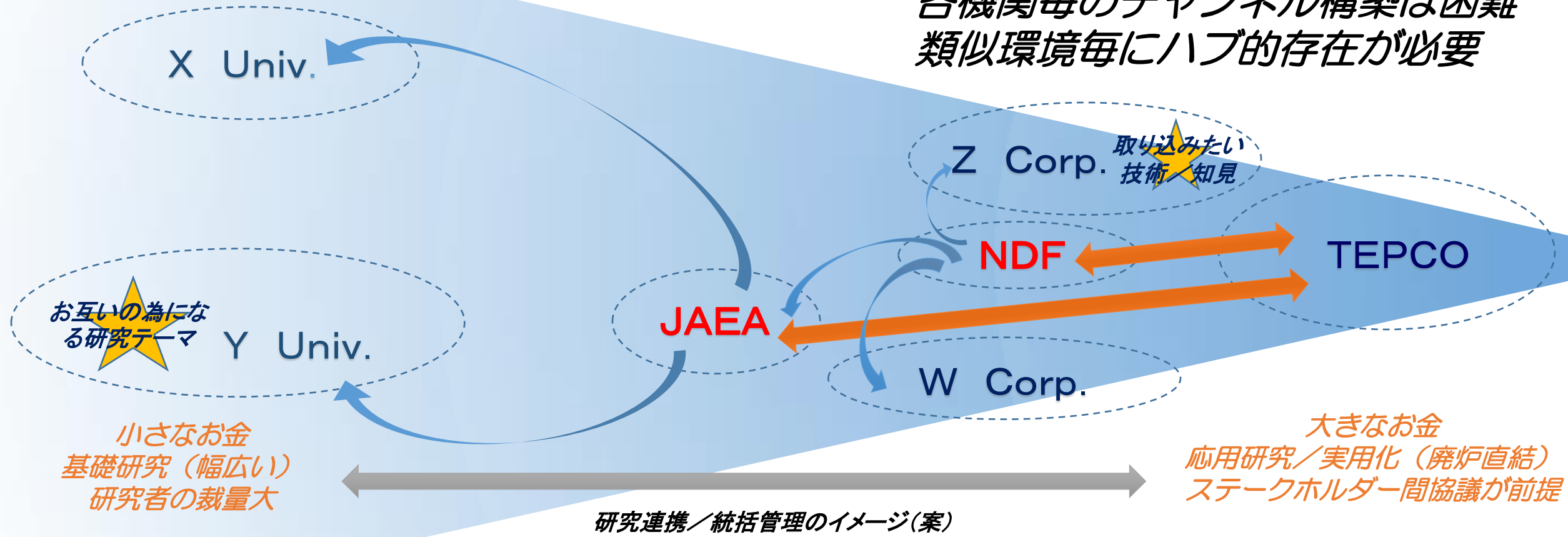
- 廃炉 or 他分野
- 1 F 事故への対応 or 1 F 以外への対応
- 応用・実用化 or 基礎・基盤
- 結果 or 研究プロセス
- • •

(青字は東電廃炉Cの立場)

立場の多様性を認めるべき

研究連携のあるべき姿：統括管理の必要性

R&Dの環境条件も様々
各機関毎のチャンネル構築は困難
類似環境毎にハブ的存在が必要



NDF殿 : 応用／実用化を中心に全体統括 (JAEA殿とも連携)
JAEA殿 : 基礎基盤系研究を統括管理
東電 : NDF殿、JAEA殿を通じ連携 (課題認識共有／情報提供／知見等取り込み)

研究連携のあるべき姿：まとめ

- 東電が自らの課題及び取組を他と共有する努力
- 対等で独立な存在としてお互いを尊重
- それぞれの立場に配慮した対話
- 幅広い連携（地理的広さ（含海外）、学問的広さ（含社会技術的分野））
- 連携効率化の工夫（ハブ的機関によるプラットフォーム提供）
- 連携管理における適切な役割分担（NDF 殿 / JAEA 殿）